

喪黒福造の「誘惑の悪魔」としての手口

ドイツの文豪・ゲーテがその生涯を捧げたといわれる戯曲『ファウスト』に登場する誘惑の悪魔・メフィストフェレス。彼と比べても、喪黒福造は見劣りしない。ターゲットとして狙いを定めた人々を陥れるまでの知略と悪辣さは際立っている。

メフィストフェレスの誘いに乗ったファウスト博士は最後、悪魔に魂を奪われるところをかつての恋人・グレートヒエンの祈りによって救済される。しかし、喪黒福造によって破滅させられるターゲットたちには、そんなカタルシスすらも用意されていない。喪黒に出会うまで、少なくとも表面的には平穩無事な生活を送っていた市井の人々は、凶悪犯罪を犯したり、廃人になったりといった結末を迎えるのだ。

この喪黒福造の誘惑の手口が、本書のテーマである。

喪黒福造とは誰かをいまさら説明する必要はないだろうが、彼が最初に世に登場してか

らなんと半世紀以上が経^たっている。喪黒福造が毎回、人を騙^{だま}し、陥れるブラックジョーク・テイストの漫画『笑ウせえるすまん』（当初のタイトルは『黒イせえるすまん』）のシリーズ第一作が『週刊漫画サンデー』（実業之日本社）に掲載されたのは一九六九年のことだ。

作者は藤子不二雄[Ⓐ]先生。私がわざわざ言及するまでもなく日本の漫画界の生けるレジエンドだが、念のためご紹介の文を付記する。

『ドラえもん』『オバケのQ太郎』『怪物くん』など一九六〇年代以降の漫画界で圧倒的な人気を誇る作品を次々と生み出した藤子不二雄は、ふたりの漫画家のコンビ名としてのペンネームだった。一九八七年にコンビを解消すると、藤本弘氏が藤子・F・不二雄を名乗り、安孫子素雄^{あびこ}氏が藤子不二雄[Ⓐ]として活動を続けた。

『笑ウせえるすまん』は日本がバブル経済の最終章を迎えていた一九八九年にアニメ化され（TBS系）、それを中学時代に見たというのが、私にとっての作品との出会いであった。その後、原作単行本を高校時代に読み、二〇一九年に、六本木ヒルズで開催されていた藤子不二雄[Ⓐ]先生の展覧会に伺う機会があって、改めて読み返したのだ。

強い衝撃を受けた。

なぜならば、はじめて作品に接してから三〇年、現在の私は脳科学・心理学を学んできている。そして、その視点で作品を読み返して、改めて気づいたのだ。

先生の漫画には真理が描かれている。

ここに描かれている通り、人間の心は簡単に操ることができるのだ。

「悪の教科書」というタブー

藤子不二雄^①先生が、なぜここまで、いふなれば脳科学・心理学を先取りするようにしてストーリーを構築することができたのか驚くと同時に、アカデミックの世界の不文律に對する不満を感じた。その不文律とは「こうすれば人は簡単に騙される」といった詐欺師の教科書になりかねない論文・著作を学者は書くべきではないという半ば無意識的な自主

規制だ。これは、ジャーナリストイックな興味がデータの解釈や実験デザインを歪めることとおそれてのことでもあるが、たとえ科学的には事実であっても、それが反社会的、あるいは通俗的な関心に寄せすぎていると受け止められれば、論文が評価を得ることは難しくなる。

私は、これまでの著作で「不倫」「サイコパス」「恨み」「いじめ」など人間心理の暗部にあってフォーカスするような本を刊行してきた。そういったダークなテーマを扱うことが冷静に評価されるようになったのも近年のことだ。

脳科学的に見れば、人間は誰でも、すぐに騙される悲しい生きものなのだ。皆、見て見ぬふりをしているけれども、このことは、私ばかりでなく多くの学者がすでに知っている事実といってよいだろう。しかし、それをわかりやすい形で世に出してしまうことには抵抗感が大きかった。

しかし、藤子不二雄[Ⓐ]先生は『笑ウせえるすまん』という作品のなかで軽々と「人間の誘惑の仕方」を描き出している。ただし、漫画のなかで紹介されている誘惑の手口を、一

般的な人の理解を求めるために汎用性の高い形で説明していくためには、科学的な裏づけに言及せざるを得ない。逆にいえば、その裏づけ・科学的解説が加えられれば、『笑ウセえるすまん』はそのまま悪のマニュアル、悪の教科書となってしまう。

結局のところ、人間が、労働あるいは資産の合法的な運用以外で現実世界の経済的な利益を得るには、手段は三つしかない。

第一は、慈悲を乞い、施しを受けること。第二は、直接的な暴力あるいは暴力を背景とした脅しによって奪い取ること。そして第三が、騙すことである。法規制の対象外は第一だけだが、三つの手段から強いてどれかを選べと迫られれば、第三を選ぶ人が過半を占めるはずだ。この「騙す（人の心を操る）」という選択肢にフォーカスした藤子不二雄^㉑先生の慧眼^{けいがん}には、改めて感服するほかない。

本書を通じて私は脳科学者の視点から解説を加えていく。そのなかで読者の皆さんには人間がどれほど弱くて騙されやすいかを知っていただければと思う。あなたのまえにもいつか、喪黒福造が現れるかもしれないから。



『笑ウせえるすまん』第4巻（中公文庫コミック版） SALE⑤7下り電車への招待

第一章

あるべくして 不完全な人間の脳

《『笑ウせえるすまん』の世界観》

「♥ココロのスキマ…お埋めします」という名刺

ココロと呼ばれるものの正体

この章では、喪黒福造がターゲットを陥れていくテクニクの基礎、人間の心理のベシツクな構造を解説していく。『笑ウせえるすまん』をまだ読んだことがないという人は、この章を通じて、そこに描かれている世界観を紹介できるはずだ。喪黒福造がターゲットに接近する手法、および具体的な騙しのテクニクの細部については、次章以降で作品の内容と照らし合わせながら詳述しよう。

セールスマンに名刺は欠かせない。

突然、闇から湧いたように現れ、ときには勝手にズカズカと相手の自宅に上がり込む。

そして、当然のことだが「あなたは、いったい誰なんですか!？」となったところで、喪黒福造は「わたしはこういうものです」と一枚の名刺を差し出すのだ。そこには、次のよう

なセールスコピーが記されている。

「♥ココロのスキマ…

お埋めします」

じつは、『笑ウせえるすまん』シリーズの掲載が『週刊漫画サンデー』で始まる以前にも喪黒福造は藤子不二雄[Ⓐ]先生の作品に登場していて（中公文庫コミック版『藤子不二雄[Ⓐ]ブラックユーモア短篇集3』に収録の「黒イせえるすまん」、ここでは名刺に「友愛事業団 外務主任」という肩書きが記されていた。シリーズ化に際して名刺もリニューアルされたことになるが、この「♥ココロのスキマ…お埋めします」という絶妙なコピーは注目に値する。

いったい、私には心のスキマなどない、と一〇〇%断言できる人がいるだろうか。仕事も家庭も完璧に満ち足りていて、未来に対するリスクヘッジも抜かりがなければ心にスキ

マは生じないのだろうか。それを考えるまえに、そもそも「心」と呼ばれるものの正体を知っておく必要がある。

解剖学者の養老孟司^{たけし}先生は『唯脳論』のなかで「心は脳の機能である」と述べている。肺という臓器の機能を呼吸と呼ぶのと同じように、脳という臓器の機能を心と呼ぶと養老先生はいうが、眼^めには見えなくても脳とは異なる「なにか」として、心は実在すると考えている人も多いだろう。

養老先生が主張された通り、心は脳の機能であると私も考えている。もしかしたら「機能の一部」というもって回った書き方をする必要があるかもしれない。脳の機能には、たとえば筋肉を動かす、内臓を制御するといった、心とはあまり関係のない働きもあるからだ。

私は心の存在について、時折次のように考えることがある。

心は、ないほうがラクに生きられる。



『笑わせえるすまん』第1巻（中公文庫コミック版） SALE③化けた男

私たちが人間は友人に裏切られて傷ついたり、未来を予測して不安に駆られたり、大切な人を喪^{うしな}つて塞ぎ込んだりする。そして、ときには自殺まで考えるほどの失意を味わう。それらはみな心の動きである。多くの人が、こうした心の動きをときには持て余し、振り回されて、苦しいと私に相談に来られることもある。心などないほうが、おそらく人生は快適に過ごすことができるに違いない。

しかし、私たちにはなぜか「心」という機能が備えつけられてしまっている。これには、いったいどういう理由があるのだろうか。